

## ヨルダン日記から

### インシャーラ（その1）

南 英雄

60期8-9

(蕨市)

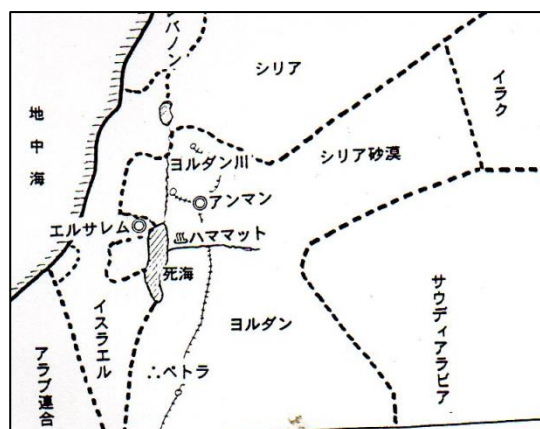


#### インシャーラ

「これを今日中に仕上げてくださいよ」とタイプスト兼秘書嬢に指示すると、「インシャーラ」と返ってくる。そして夕方近く「あれは出来たか」と聞くと、「ブクラ」と言って平然としている。インシャーラとは、「神の思召しのままに」という意味である。ブクラとは、「明日」のほかに「また明日がある」という意味である。如何にも砂漠の大自然に生きる心構えである。これらはなんと便利な言葉であろう。

私は1980年から1986年まで、断続的に4年余り中近東のヨルダン国に滞在した。私が、かつて勤めていた大日本電線（現三菱電線工業）が、ヨルダン国電々公社から当国の首都アンマン市の電話拡張工事を請負い、その責任者として出向していたのである。工事規模は、1次、2次さらに追加契約、合計約200億円であった。電話ケーブルを入れる地下管路と、ケーブルを直接埋めるための両者の溝の長さは約800km、ケーブルを接続するための孔（マンホールとハンドホール）約800コ、東京環状線内より狭い市内は、至る処穴だらけ

であった。最盛期には日本人50人余、ヨルダン人200人余、エジプト人500人余が稼働した。当市内の土質は固いので、掘削はすべて圧縮空気の掘削機に頼らざるを得なかった。このため交通渋滞と夜どおしの騒音は必然的であった。現在の日本では政界、財界、民衆がこぞって反対し、このような施工方法は不可能である。ここでは、お上のご用であるが故に、そんな気配りは一切ご無用であった。反面どんなに忙しくても、お祈りの放送がモスクから流れ始めると、直ちに仕事を止め、その場で専用の布を敷きメッカに向かってお祈りをする。その間約20分、日本人はぼんやりと眺めていた。これはすべてインシャーラに通じるものであり、私達はいたる所でこれに接していた。



ヨルダンとその周辺国

#### ヨルダンの風土

次にヨルダン国の地勢などについて述べる。ヨルダンの大部分は土漠である。アンマン市は標高約800mの高原で湿度が極めて低いので、真夏でも街路樹の陰では暑さを感じない。そして7つの大きな丘と谷間で構成されているので、向こうの丘の夜景は実にきれいである。四季があり、冬は

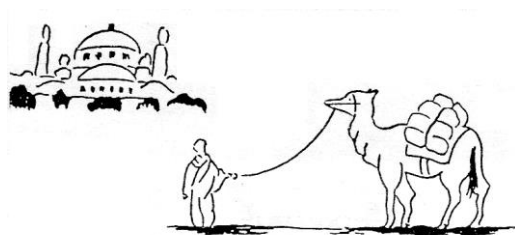
雨や雪が降る。春の郊外は一面に緑と桃、  
アンズをはじめ諸々の花が咲き、羊の群が  
悠々と流れる。

春の光りに目覚めたる  
緑さやかに甦えり  
幾多の花が咲き誇る  
我等が愛するアンマンぞ

## 死海

5月に入るともう夏、草原の緑は消え黄  
茶色の土漠と化し沿道の並木だけが緑を保  
っている。アンマンから車で約1時間下る  
と有名な死海がある。水面は-340m、一帯  
は亜熱帯であり冬でも泳ぐ若者がいる。水  
の比重が重い(約1.3)ので、クローリングは出  
来るが、平泳は足が浮くので不可能。足を  
動かさないで立泳ぎし、両手を上げて書き  
物が出来る。波打際の砂浜のあちこちに藻  
のような雑草が繁り、水が湧き出ており、  
そこには目高のような魚が泳いでいる。死  
海には魚がいけないというのは広い意味では  
誤りであろう。

夏の光りの肌を刺す  
空澄みわたり紺碧に  
古きを伝う死海水  
我等が戯む磯なるぞ



秩父平成6年7月 44号

## ヨルダン日記から

### インシャーラ (その2)

—「インシャーラ」とは、前編において述  
べたように「神の思召しのままに」という  
意味である。これを知らなくてはヨルダン  
では暮らせない—

### 温泉地ハママツト

アンマン郊外の荒涼とした秋の荒野の処  
どころに、セメントブロック造りの小さな  
集落がある。しかし住人はいない。これは  
政府が遊牧民の定着化を図るために設けた  
ものである。しかし国境のない彼等には、  
定着すれば唯一の財産である羊を飼えない  
のである。いずこの役人も庶民の実態が分  
からないようである。市内から車で約1時  
間の処に水量豊富な温泉(地名:ハママツ  
ト)がある。高さ約30mの温泉の滝から  
川(幅5~10m、深さ20~40cm)と  
なる。また同方面に魚釣り(はやに似たも  
の)の出来る川もある。バーベキューをし  
ながら温泉に浴し、はたまた釣りや水泳を  
したりして休日を楽しんだ。

秋荒涼の岡と野に  
羊の群れの垣間見る  
谷間にとびかう湯煙りは  
我等が憩うハママツト

### ペトラの城跡

春、夏、初冬にかけて毎日大地は乾きき  
り、吸い込まれるような雲一つない紺碧の  
空を仰いでいるが、晩秋になると淡い雲の

欠けらが見え始める。人も羊もこれを待ちかねている。小雨が降り始める。丘と谷で構成されているアンマン市内は、1月からの豪雨できれいに洗い流され、また、しばしば降る雪は車社会を拒絶する。アンマン市の南方約200 Kmのペトラに数千年前の城跡がある。高さ数10m、垂直に切り立つ城壁が数Km続いている。幅数mの部分がいくつかあり、天然の要塞となっている。あちこちの広場には城壁を穿った居室や神殿が多くある。連隊単位以上の兵員を収容できる陣地であっただろう。強烈な軍であったが、城壁に穿った延々数Kmに及ぶ水路の源を絶たれたので、遂に敗れたとのことである。

ここは、世界各国からのヨルダン観光の中心地として賑やかである。俄か仕立てのアラブ服装で馬に乗り、馬丁の案内で見物した。振武台での馬術と、数千年前のアラビアンナイトが彷彿とするとともに英気を養い得た。

冬の恵ぞ濃雲低し  
馬上豊かに谷間行く  
猛者どもの夢の跡  
ヨルダン誇るペトラなる

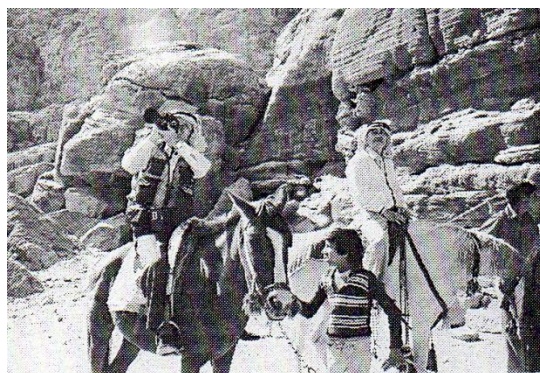
## ヨルダンの王家

この国は王国である。王様はマホメット約40代の直系と称しており、由緒ある家系である。大変利口な方で、国民の信望は高く国際的にも活躍している。自分で車やヘリコプターも運転する庶民的な面がある。王宮は一つの丘にあり、近衛部隊もいる。

私は王宮内の工事のためしばしば入ったが、実に質素な建物である。その中でバリ

バリやったので、王様もさぞかしうるさかったであろう。始めの頃、入門時私の体と車の点検は厳しかったが、日本人は信用されていたせいもあって、やがてフリーパスとなり、厳めしい衛兵の敬礼を受けて入門したのはいい気持ちであった。

この王家はイラク王家と親戚である。このため1980年に起ったイラクとイランとの戦争のとき、ヨルダンはイラクへの物資輸送ルートとなり、私達の日本からの資材陸揚げが半年も遅延する被害をうけた。そればかりではなかった。多くのヨルダン人がイラク軍へ志願して行ったが、私達の工事の現場監督補助もいく人かこれに加わった。彼等はすべて仕事が良くでき、真面目であった。志願兵の給料は当方のその数の分の一であった。「給料が安いのに何故行くのか」との質問に対する答えは、「イラクは我々の友である。インシャーラ」であった。この精神は、振武台教育を受けた者には理解できるだろうが、現代の日本人の大方には疑問であろう。



気分は正にアラビアンナイト（右筆者）

## インシャーラの話をもう一つ

ある日の朝早く、電々公社の副総裁から電話で非常呼集がかかった。「重要な電話回線が多く切られたから直ちに現場へ来てく

れ」と。現場を見て驚いた。建設した地下管路が路上に放り出され、太い幾本ものケーブルがずたずたに切られて路上にのたうっている。総裁はじめ電々幹部は、ただわいわい騒いでいる。「500 程の加入者回線がきられた。軍及び政府高官の 10 回線程を早急に直してくれ」と。そして、これらは数時間で暫定回復させた。

当該道路は傾斜し、かつ起伏があったので、道路管理者が傾斜を緩くし、起伏を取るためブルドーザーで削り、盛り上げたのである。このためマンホールと下水マンホールの胴体や管路も壊されたのである。ブルドーザーの運転手に詰問すると、「上司の命で仕事をした。工事に支障のあるものは取り除く。インシャーラ」と。

このように常識では考えられないことでもインシャーラで解決する。1985 年のハッジホリデイ（回教徒の休日）にイスラエル旅行をした。イスラエルが占拠しているかの西岸地域を通り、その重要性を認識した。この地域は野菜、果物、羊が豊富なので、イスラエルとパレスチナ人にとっては譲れるものではない。神の思召しのままに子を増やして民族の増強を図り、思召しのまま行動するパレスチナ人にとっては、この地域に彼等の国が平和裡に建設されるまで、火種は絶えないだろう。

現在の彼等は、信頼できるのは政府ではなく、親族と純金の装身具のみであると言っているが、インシャーラ、ブクラの言葉どおり、砂漠に生きる回教徒民族の粘り強さは侮ることはできない。これと同時に、このような火種の源を創設したのがかつての西欧諸国であったことも忘れられない。任務を終えて帰国する方々に、私は空港で

「インシャーラ」と言って見送ったが、私が最後の一人となって帰るとき、ヨルダン人からの別れの言葉も「インシャーラ」であった。

（「予科 8-9 日より、No. 16、平成 5 年 10 月号」より転載）